魔法戦記リリカルなのはLastwitch's

シーラ・コードウェル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法戦記リリカルなのはＬａｓｔｗｉｔｃｈ'ｓ

【Ｎコード】
Ｎ１１７０Ｘ

【作者名】
シーラ・コードウェル

【あらすじ】
かつて世界を騒がせた組織、フッケバインによる事件が特務六課の活躍によって鎮圧されてから数年。
世界情勢は不安定ながらも仮初めの平和を享受していた。
しかしそれから数週間経ったある日、第０管理世界ミッドチルダに正体不明の機動兵器の大軍が襲来したのを皮切りに、管理世界各地も機動兵器の襲来に遭い、全世界規模で多数の犠牲者と膨大な被害を生み出してしまった。

かろうじて生き残った時空管理局は同じく生き残った三大企業、管理世界と結託し「アライアンス」として再編される。

しかし、突如として八神はやてが守護騎士たちと局員数百人を連れアライアンスを脱退、テロリストであるジャック・Ｏと手を組み武装組織「バーテックス」の設立を宣言、アライアンスの打倒と魔導兵器による新たな秩序の創出を旗印にアライアンスに総攻撃を予告した。

バーテックスが総攻撃を予告した刻限まで後２４時間……戦局の行方は、大乱を生き延びた３２人の魔導師の手に委ねられたのだ。

序章

運命とは、時に残酷な毒であり。

時に、抗いがたい甘美な薬になりうる。

個人の運命など、その人間にはわかりはしない。実際、わかるとするならばそれは神くらいしかいないだろう。

否……ひょっとしたら運命なんてものはあるわけがなく、その人間の動きで無作為に、ランダムに変わるものかもしれない。

いずれにしろ…その問いに明確な答えなどないと言えるのだけは確かだ。　単に、人の持ちうる思考能力を遥かに超えた概念を信じたくないとも言えるかもしれない。

さて、これを見ている諸君たち……長い前説も飽きただろう？

というわけで、今から話をしよう。

アレは今から５０年……いや、４０年前だったか。

まあいい、君たちにとっては多分…明日の出来事なのだからな。彼女には二つの名があったから、なんと呼べばいいのか……。

確か、最初に会った時は…「タカマチ・ナノハ」…。

あいつはかなり頑固なヤツだったからな……。

だが……それでもいい奴だったよ、彼女は。

これから話すのは、そんな彼女を始めとした３２人の魔導師たちの物語だ。　どうか、最後まで付き合ってくれよ？

タイトルは…そうだな、敢えてこう名付けよう。

魔法戦記、リリカルなのはＬａｓｔＷｉｔｃｈ’ｓ……始まります。

ＭＩＳＳＩＯＮ００：鉄騎　―アーマード・コア―（前書き）

アーマードコアにハマって書きたくなった作品です。

オリ設定多数に原作キャラ死亡、自己解釈多数とかなりありますので、苦手な方はオーバードブーストで即刻待避してください。

ＭＩＳＳＩＯＮ００：鉄騎　―アーマード・コア―

旧第０管理世界ミッドチルダ旧首都、クラナガン

ここは９年前に時空管理局と次元世界で大きく名を馳せた三大企業を母体に再編された秩序管理組織「アライアンス」の本部がある地である。

人こそ多く活気があり賑わっているが、かつてのクラナガンからは考えられないほど破壊されつくされており、未整備の道路や破壊されたビルなども多く目立っている。

さて、まずはミッドチルダが荒廃した理由を語ろう。

今から９年前、特務六課の活躍によってフッケバインが逮捕された僅か数週間後に、正体不明の機動兵器の大群がミッドチルダに襲来したのである。　それどころか、管理局の傘下にあった管理世界にも同じく機動兵器が襲来してきたのだ。

管理局は魔導師たちを結集し迎撃に当たったものの、圧倒的な機動兵器の物量とそれぞれに搭載されていた超高濃度のＡＭＦ粒子によって魔法が無力化され、多数の魔導師が死亡したのである。

この騒動で次元世界規模で多数の犠牲者を輩出、そのうえ機動兵器に搭載されていた超高濃度ＡＭＦが管理世界中を満たし、今後２５０年間自然による
除染が不可能となってしまった。

これにより、管理局は自分たちが頼りにしていた魔法という絶対的

な力を封じられてしまった。

なんとか生き残った管理局は旧暦時代から管理局と繋がりが深かった三大企業…「ミラージュ・アーマメンツ」「クレスト・インダストリアル」「キサラギ・サイエンス」と手を組み、新たな平和維持機構としてアライアンスを設立したのである。

アライアンスが設立されたことにより、世界は確実に安寧への道を向かっていったが、解決されていない大きな問題があった。

それは、「軍事力」である。

超高濃度のＡＭＦによって魔法が封じられ大量の魔導師も犠牲になったアライアンスには、今までのようなクリーンな魔導技術を用いた兵器の運用は出来なかったのである。

議会や民衆の総意もありアライアンスは断腸の思いで管理局時代から続く質量兵器禁止条例を撤回、ある意味で魔導師の優遇される時代は終わりを告げた。

それから3年後、世界中で魔法至上主義を支持する者たちと現体制を支持する者に別れ、世界中で散発的にテロや紛争が続いたが、ある兵器の台頭により爆発的に鎮圧される。

かつて旧暦時代に実際に使われ、長い間管理局の手によって封印された準人型機動兵器ＡＣ…正式名称「アーマード・コア」の台頭である。

アライアンスはクレスト・キサラギ・ミラージュの技術者と共にそのＡＣを独自に解析、量産に漕ぎ着けたのだ。

ＡＣが戦場に投入されたことにより、反乱分子はあっという間に鎮圧されていった。

ＡＣの活躍によりその存在は瞬く間に世間に浸透していった。
アライアンスはＡＣに加えその下位互換型である汎用機械ＭＴこと「マッスル・トレーサー」を量産、傘下の次元世界に次々と輸出していった。
それがテロリストの手に渡る危険性を知りながらも、アライアンスは貴著な収入源の一つを手放すことが出来なかった。

そして、その予感は現在に最悪の形で的中することになる。

数日前、八神はやてと守護騎士たちが突如としてアライアンスを離反。
かつて反管理局組織を率いていた若きカリスマ犯罪者「ジャック・Ｏ」と手を組み武装組織バーテックスを設立、魔導技術の復活と新たな秩序の創出を旗印にアライアンスに宣戦を布告したのである。

これに対しアライアンスはバーテックスと戦闘状態に突入、長きに渡る戦いが始まることとなる。

そして本日、バーテックスがアライアンスを総攻撃するという宣言がなされた。
その総攻撃までに残された時間は、後２４時間までに迫っていたのである。

話を戻そう。

そのクラナガンの喧騒から外れた郊外にある静かな農村「ブラームス」。
その小さな集落の中に、旧管理局時代に残されたと思しき倉庫がぽつりと建っていた。

その倉庫の二階にある一角、割と大きな部屋の片隅にある質素なベッドには一人のまだ若い男が寝ていた。
短く刈った美しい銀髪とやや目鼻立ちの整った端正な顔付きが印象的で、顎には少し濃い無精ひげを生やした男だ。
そして、彼の眠りを妨げるかのように目覚まし時計からけたたましく電子音が響き、彼の意識を現実へ引き戻した。

「…っかぁ、何だようっせえな……」

男はまだ目が覚めきっていない体で目覚まし時計のアラームを止めると、緩慢な動作でベッドから身を起こし、軽く体操を始める。

「……魔導師と魔法至上主義の天下は終わっちまった、な…俺も消え行く運命か」

体操を終えて体を完全に温めた男は、癖だらけの銀髪を掻きながらどこか自嘲気味の笑みを浮かべながらそう呟き、部屋の隅に掛けていた茶色のブレザータイプの制服を見た。

この男の名は「ユウジ・ナルミ」。アライアンスが設立される前は、時空管理局地上部隊の一陸士であった。

彼には憧れていた女性（ヒト）がいた。
管理局員時代、エースオブエースとして名を馳せた女傑であり、アライアンスの賞金首の一人である「高町なのは」である。
だが、あの機動兵器の襲来で行方不明となり、一部ではすでに死んだのではないかという噂まで広まっているらしい。

「お兄ー！　朝ご飯だよ！！」

すると、一人の少女がフライパンとおたまを持ったままガンガンと叩きつけながらユウジの部屋へ上がり込んできた。
黒く短い髪に、快活そうな表情をした１０代前半の少女だ。

「あぁ…悪いなリリア。今行くから……少し黙っててくれ」

ユウジは少女「リリア」に気だるそうにそう返す。
彼女は、家族を亡くしたユウジにとって唯一の肉親である。

「やれやれ…お兄はいつもこうなんだから。
早く顔洗って、その髭剃ってきてよね」

「ああ、わかったわかった…ふあぁ」

欠伸をしながらリリアに返すユウジ。
眠い目をこすりながら、そのまま洗面所へと向かった。

１０分後、ユウジはパイロットスーツに着替えリリアと共に早々に朝食を済ませていた。

「お兄、バーテックスから依頼来てるよー」

「ん、どれどれ…ふぅん」

リリアから渡された端末に届いたメールを確認するユウジ。

Ｓｅｎｄｅｒ：バーテックス代表

ｔｏ：ｃｒ２２１８５９２４｜２１５５８０９５｜ｅ９０６５２８@ｍｍ．ＹＵ－ＺＩ．

ｔｉｔｌｅ：依頼

本文：

ブラームレオン市、旧ナイアー産業区に侵入した所属不明部隊を排除してもらいたい。

たかが弱小勢力が迷い込んだだけとはいえ、我々の襲撃予告時間までの時間を考えると、何事にも慎重に当たって正解だろう。

我々の本拠地に土足で入り込んだ奴を見逃せる情勢では最早ないのだ。

君には侵入者をすべて撃破してもらいたい。それでは、よろしく頼む。

追記・報酬はいつも通り、依頼終了後に支払うのでそのつもりで。

バーテックス仲介人・シグナム

「ふぅん…まあ、楽な依頼だな」

メールの本文を軽く読み流したのち、端末をスタンバイモードにさせながらリリアに言うと、ガレージの中に鎮座してある巨大な蒼い人型のロボット……ユウジの愛機である中量二脚タイプのＡＣ「フレアライル」もとへ向かう。

「おーいＡＤＡ（エイダ）、出番だずぇ」

ユウジはフレアライルのコクピットに搭乗すると、ぼさぼさだった髪を手櫛で直しながら何者かに言う。

『おはようございます、ユウジ。　すでにスタンバイは完了しています』

すると、女声と共にコクピット内の計器類が一斉に目を覚まし、コクピットが閉ざされ外界から遮断されていく。

「よし、んじゃ頑張って行きますか。わっちらの生活を守るために」

『了解しました』

ユウジはＡＤＡに返すと、そのまま小さく息を吸い込み操縦桿を握る。そして、リリアがあらかじめ解放してくれたガレージのゲートに向けてフレアライルを歩かせる。

４５分後　ナイアー産業区

フレアライルは依頼通り、バーテックスの拠点であるナイアー産業区に到着していた。

『敵が脱出を図っています。領域から脱出される前に全機撃破してください』

「っしゃあ！！」

ユウジは自分に渇を入れると、フレアライルのブースターを点火し一気に前進する。

「まず一機ッ！！」

フレアライルの高い機動力を生かしながら、手近にいたＭＴを左腕のレーザーブレードで切り裂き沈黙させる。　ユウジの操縦技術がかなり優れているという片鱗だ。

『くっ、バーテックスのＡＣだ！！　総員、ズラかるぞ！！』

『了解！　く…レイジングスターを呼べ！！』

フレアライルによって部隊のＭＴの一機が撃破された指揮官は、慌

てて生き残っている部下たちに通信を下し、ＭＴ部隊は一斉に領域から逃げ出し始める。

『敵部隊、逃走を始めました。全機撃破してください。ミサイルの使用を提案します』

「了解！　任せる！」

ＡＤＡにそう返し、フレアライルの右肩にある小型ミサイルポッドから誘導ミサイルが数発吐き出される。

これも命中。進行方向にいたＭＴ三機はそのまま爆散、ただの鉄屑へと変わった。

すると、レーダーに新たに三つの反応が現れる。

『敵増援を確認。各機撃破してください』

「わかってますよ！」

ユウジはＡＤＡにそう返しながら、フレアライルを旋回させ進路を変えると、再度ブースターを点火しＭＴ三機に肉薄する。

ＭＴ三機がフレアライルに向け集中砲火を浴びせかける。

フレアライルはブーストを全開にしながらＭＴ三機からの砲火をかいくぐり時には命中しつつも、そのまま右手に持ったレーザーライフルを乱射。

それだけで二機のＭＴを叩き伏せた。

「ラストっ！」
操縦桿を荒っぽく回すユウジ。　残った最後のＭＴを左腕のレーザーブレードでを薙ぎ斬り、切り裂かれたＭＴはそのまま鉄屑へと変わった。

『敵反応の消失を確認。お疲れ様です、帰還しましょう』

「ういういい、今日も楽勝だったな」
ＡＤＡの言葉にユウジはそう返すと、そのままランページの機首を翻しつつブースターを点火、戦域から離脱していった。

フレアライルが去ってから１０数分後、誰もいなくなったナイアー産業区に蒼と白に塗り分けられた一機の中量二脚型ＡＣが現れた。
機体構成はミラージュ製の中量型パーツで固められたバランスタイプで、武装はハンドレールガンにレーザーブレード、肩に携行型グレネードランチャーとレーザーキャノンで固めたタイプだった。

「この静けさ……遅かったというの…」
謎のＡＣは周囲に散らばったＭＴの残骸を見るなり悔しそうにそう呟いたのち、機体を旋回させブースターを点火させる。
そしてそのまま、猛スピードでその場から去っていった。
そのＡＣの左肩に描かれた、桜色の流星を模したエンブレムを輝かせながら。

同じ頃　旧ベルカ自治領聖王教会跡　バーテックス本部

「…ふぅ」

鋭い目つきをした長い赤毛をポニーテールで纏めた女性が、書類を纏めながら目頭を揉んでいた。

「お疲れ様やな、シグナム」

すると、その女性「シグナム」の背後からまだ年若い短い茶髪の女性が現れた。

「これは……主はやて。　いかがなされましたか？」

シグナムは背後に現れた女性に慌てて一礼する。

そう、この女性こそがアライアンスに反抗する最大最悪の武装勢力バーテックスの副首領「八神はやて」である。

「かまへんかまへん、シグナムには仕事も任せっきりやしな。感謝するのはウチの方やよ……。
それはそうと、ナイアーはどうなったん？」

はやては首を軽く回しながら、シグナムに訪ねた。

「ユウジは無事ナイアーを守り抜いたようです。付近の部隊からも展開していた武装勢力も殲滅したとの報告が入っていました。
エイリム山に建造中の要塞破壊に出ていたヴェロッサと騎士シャッ

ハ、ンジャムジも間もなく戻るそうです」
シグナムは書類の文面に軽く目を通しながら、はやての問いに一分の隙もなく答えた。
「そか、色々すまへんな。
んじゃ、ウチは機体の整備に戻るから後はよろしくな」
「はい、お任せ下さい」
はやてはシグナムにそう言い残し、シグナムは再び一礼しながらはやてを見送った。

「…なのはちゃん、フェイトちゃん…きっとうちらが裏切ったことをまだ恨んでるんやろな……。
けど、仕方ないんや……。
けど、仕方ないんや…この世界に平和を齎すためには、あいつを倒さなきゃならないのや……」
はやてはそう悔しげに呟くと、足早にACが格納されているハンガーへと去っていった。
それから20分後　エイリム山麓
ここにあったのは、バーテックスに破壊されたたアライアンスの建

造中要塞だ。

そこに、重装備型ＭＴ中隊を引き連れたＡＣが数機現れた。
一機は蒼と白を基調としたミラージュ製のパーツで固めた重量二脚型のＡＣ「サイレント・ゼフィルス」で、もう一機は紅白を基調としたタイプの中量フロート脚型のＡＣ「ライデン」。

そして蒼を基調としたカラーリングの中量二脚型ＡＣ「オラクル」と、黄色と黒に塗り分けられた軽量二脚タイプのＡＣ「ライトニング・レディ」だ。

「く…遅かったみたいですね、スバルさん……」

「そうだね…。バーテックスめ、なんでこんな酷いことを…！！」

紅白のＡＣ…ライデンのパイロットは若さを感じさせる青年の声で悔しげに呟き、ゼフィルスのパイロットはまだ年若い女性の声でその呟きに相槌を打った。

「…ハラオウン隊長、追撃しますか？」

オラクルのパイロットがライトニング・レディに問う。

「落ち着いて下さい、エヴァンジェ一佐。裏切りが普通に横行してるこの情勢です、次も敵とは限らないでしょう」

オラクルのスピーカーから、ライトニング・レディと思しき落ち着いた女性の声が響く。

「…了解しました。総員、撤退するぞ」

オラクルのパイロット、エヴァンジェがライトニング・レディの通信に答えると同時に、アライアンスの部隊は旋回しその場から去っていった。

総攻撃まで、あと２２時間。

ＭＩＳＳＩＯＮ００：鉄騎　―アーマード・コア―（後書き）

ちなみに、今回でなのは側の原作三人キャラが登場していたりします

Ｒｅｐｏｒｔ：００（前書き）

今回のあらましがわかるようにしたレポート的なものです。

文面がかなりイラつくような感じになっていますが、仕様なのでご了承下さい。

Report：00

ＡＣ

正式名称はＡＲＭＯＲＥＤ（アーマード）　ＣＯＲＥ（コア）で、その頭文字を取った通称。コアと呼ばれる胴部を中心に頭部・腕部・脚部など各種のパーツを組み上げて制作される汎用型機動兵器である。

機体の各部位をユニット化することにより高い汎用性を獲得しており、地形を選ばず様々な活躍が出来る。

本来は旧暦時代に実際に使用された質量兵器で、その危険性を危惧した旧管理局によって破壊、または封印されていたものである。

最後の一機も破壊する予定だったがその矢先に機動兵器の襲来に遭い、この事件で世界規模で多数の犠牲者が出たのと優秀な魔導師が多数戦死したことで日の目を見ることとなる。

旧管理局がアライアンスとして再編され、さらなる脅威の対抗のため質量兵器禁止条例が破棄された際、管理世界中で現体制側と魔導主義側に別れた紛争やテロが勃発した際、アライアンスが有事に備え量産したＡＣ部隊を投入、瞬く間に鎮圧したことからその名が知れていくこととなった。

その後、アライアンスは兵器生産に代わる新たな産業として各管理世界に兵器とＡＣの輸出を始め、多大な利益を上げている。

基本は陸戦メインだが、宇宙空間での作戦行動やフロートウイング

による空戦も可能となっている。

動力源は不明だが、アライアンスが所有していた全てのＡＣのオリジナルには旧歴時代のオーバーテクノロジーが用いられているらしい。

アライアンス

機動兵器の襲来によって疲弊した管理局が企業群を合併して設立した新たな平和維持機構。　戦力として質量兵器やＡＣ、傭兵や旧管理局の職員で構成された特殊部隊を有する。

また、独自の動きを取る旧企業の一派も存在するため、歴戦の兵士たちで構成されたバーテックスに遅れを取ることもある。

バーテックス

アライアンスを離反した八神はやてと反管理局派テロリストであるジャック・Ｏが創設した武装集団。

はやてとジャック・Ｏの政治力とカリスマ性によって瞬く間にアライアンスと世界を二分する程に成長した。

大乱を生き延びた屈強な傭兵や一部の旧管理局職員、アライアンス支配に反対する武装勢力で構成されている。

アライアンスによる支配からの脱却と、質量兵器の廃絶と魔導主義の復活による秩序の創出を標榜としているが……。

ACパイロット　レポート

フレアライル／ユウジ・ナルミ

旧管理局時代の一陸士だが、あの機動兵器襲来を妹とともに生き抜いた卓越した生存技能の持ち主だ。

妹と故郷を守るためにMTによる傭兵稼業を続けていたが、数か月前にACに乗り換えたようだ。

その操縦技術はまだ荒削りなところも多々見受けられるが、時々恐るべき才能の片鱗を見せることもある。

今後の活躍に期待…ということだな。

レイジングスター／???

常に受けた依頼を必ず完遂することで有名なACパイロットで、その正体が女であるということ以外誰も確かな情報を知り得ていないらしい。

噂では、大乱で死亡したとされている旧管理局のエースオブエースこと、高町なのはではないかとも言われている。

いずれにしても、真偽は定かではないがな。

しかしヤツの腕前は本物だ、くれぐれも油断はするなよ。

ライデン／エリオ・モンディアル

アライアンスの戦術部隊に身を置く旧管理局時代の魔導師の生き残り、それもかなり影響力が強かった機動六課の一人だ。
まだ１０代後半とかなり若いためか、操縦技術はお世辞にも上手いとは言えず機体に振り回されることも多いそうだ。

実直すぎるほどの好青年だが、この時勢ではそう言った奴から先に死んでいく。
もし仮に敵対することになったら、楽に倒してやれ。

サイレント・ゼフィルス／スバル・ナカジマ

アライアンス戦術部隊に属する若きエースの一人で、彼女も機動六課の一員だったらしい。

アライアンスの正義を盲信しており、はやてを誑かした（と本人は勝手に思い込んでいる）ジャック・Ｏと、自分たちを裏切った八神はやてを憎んでいる。

頭の悪そうな外見に反してＡＣの操縦技術には目を見張るものがあり、重量級のＡＣをまるで中量級機体のごとく操る様から誰が見ても一流の域に達しているだろう。
決して油断はするなよ。

ライトニング・レディ／フェイト・Ｔ・ハラオウン

アライアンス戦術部隊のリーダーで、旧管理局時代のエースだ。
敵味方から「迅雷の女神」という異名を持つ。

異名が現す通り、彼女の機体は徹底した軽量化したピーキーな機体を容易く操り、相手を翻弄して一撃で葬り去るというスタイルを取っている。

そのうえ外見も絶世の美女で、その美しさに心奪われる男もかなりいるらしい。

お前も骨抜きにされないよう、気をつけろよ。

オラクル／エヴァンジェ

アライアンス戦術部隊の副隊長で、フェイト直属の部下だ。

実力は確かだがそれ以上に自己顕示欲が強い為、あまり評価は高くないようだ。

その上上司であるフェイトとの関係も良いどころか最悪という始末である。

だが先ほど言った通り、ヤツはアライアンスのエースの一人だ。

出くわしても無闇に戦おうなどとは思うなよ。

まあ…今回のレポートはこんなところかね？

んじゃま、また次で会おうか。

ＭＩＳＳＩＯＮ０１：魔導師　―ウィッチ―（前書き）

今回、初の原作キャラクターがライウン先生の洗礼を受けます。

ＭＩＳＳＩＯＮ０１：魔導師　―ウィッチ―

クラナガン　旧時空管理局地上本部跡　アライアンス本部

「はぁ…なんでこんなことになったのかな…」

フェイト・Ｔ・ハラオウンは、今のすべてが憂鬱だった。

理由は言わずもがな、バーテックスに寝返ったはやてと変わり果てたこの世の中、もう一人の唯一無二の親友の行方だ。

「なのは…ヴィヴィオ……どこへ消えたというの？」

フェイトはこの意味の分からないループから逃れるためにふと呟くが、その問いに答えるものはいなかった。

その結果として、フェイトはさらに頭を悩ませることとなってしまった。

そんな中、机の上に置かれていた端末から済んだ電子音が鳴った。

「っ！　…はい」

フェイトは直ぐに頭を切り替え端末のスイッチを入れる。

「フェイト、僕だ。

実はまた君たちに頼みたいことがあるんだ」

「ああ…どうしたのクロノ？」

フェイトの端末には、青髪の青年が映し出されていた。
彼がおそらくクロノという人物なのだろう。

「上から君たち特務部隊に再度出動命令が出た。
ディルガン流通管理局がバーテックスに襲撃、制圧されたと報告が入ったらしい」

「…っ！！　あそこは確かクラナガンからリュードラを結ぶ重要な中継地点で、本部に通じる最終防衛ラインだったはずだね」

バーテックスという単語にフェイトは表情を一瞬強ばらせるが、すぐに表情を戻しながらモニターの向こうにいるクロノに言う。

「ああ。ここが制圧されれば我々本部は守りを失い、奴らはクラナガンに通じるルートを手に入れることになる。
そこでだ、君たち特務部隊にはディルガンを奪還、バーテックスを殲滅してもらいたいんだ」

「…わかった、すぐに部隊を集めるから」

フェイトはクロノにそう返すと通話を切ると、机の端末からエヴァンジェのアドレスを呼び出す。

『お呼びでしょうか、ハラオウン隊長』

しばらくのコールの後、端末からエヴァンジェの声が響いた。

「エヴァンジェ一佐、大至急特務部隊のＡＣパイロット全員を格納

庫に集めてください」

「…了解しました。
では後ほど」

端末のスピーカーからエヴァンジェの声が響くと、フェイトは深く溜め息をつきながら格納庫へと向かった。

数分後　アライアンス戦術部隊本部　格納庫

あれから数分たったのち、格納庫にはフェイトやエヴァンジェを始めとした戦術部隊のＡＣ乗りが集められていた。

「みんな、さっき上層部から連絡があったよ。
我々アライアンスは現時点を以てバーテックスをＳＳ級犯罪組織に認定。
同時にジャック・Ｏと八神はやての抹殺命令が下されました」

フェイトの言葉に、旧機動六課出身のＡＣパイロットに衝撃が走る。
そしてそれに続く形で、エヴァンジェが口を開く。

「本部は名の知れているバーテックスの人員やＡＣパイロット、旧管理局員に首に賞金を掛けると発表した。
また、バーテックスも我々アライアンスに属する人員の首に賞金を掛けるとの声明が発表された。
恐らく諸君は、これまで以上に危険に晒されることになるだろう」

エヴァンジェから下されたある意味死刑宣告に等しい言葉に、一同は息を呑む。

「だけど、忘れないで。私達は法と秩序の守護者、私達の力は平等に皆を救うためにあります。
だからみんな、今一度バーテックスを倒し平和を齎すために頑張ってください！」

『了解！！』

旧管理局の人員は口を揃え、勇ましくフェイトに答える……が、一部の傭兵や犯罪者あがりの者は当然アライアンスの正義など正直どうでもいいとしか考えてなかった。

「私からは以上です。皆の働きに期待しています。解散！！」

その号令と共に、格納庫にいた者たちは慌ただしくそれぞれの持ち場へと戻っていった。

「エリオ君…大丈夫？」
ＡＣハンガーへ向かう途中、やや幼い顔立ちをした桜色の髪の少女「キャロ・ル・ルシエ」が傍らを歩いていた赤毛の青年に問うた。

「大丈夫だよキャロ…バーテックスやはやてさん達が来ても、僕たちは全て倒すだけだから。
それに……このままじゃなのはさんやフリードも、ヴォルテールも浮かばれないじゃないか」

キャロの言葉に、赤毛の青年「エリオ・モンディアル」は辛そうな表情を隠せずにそう返した。

―――高町なのは。

旧時空管理局のエースオブエースと呼ばれた稀代の魔導師…と賞賛されていた。
しかし、いつぞやの機動兵器襲来の際に起こった混乱により戦死してしまったのだ。

「……そうだね、エリオ君。なのはさんやフリードたちの犠牲があって私達は無事生き残れたんだよね…。とりあえず、今は目先の敵だけを考えよう？」

「…わかったよ。キャロ、無理はしないでくれよ」

エリオとキャロはそう口にしていたところで互いの愛機の元に辿り着く。
一機はエリオの愛機である軽量型フロート脚型ＡＣ「ライデン」で、もう一機は白とピンク色に塗り分けられた中量逆脚型のＡＣ「ヘルダーリン」だ。
エリオとキャロは慣れた様子で自分のＡＣのコクピットに滑り込むと、シートベルトを締め愛機を起動させる。

二機のＡＣの瞳が、妖しく輝く。
ライデンはフロート脚に内蔵された浮遊機構によりゆっくり宙に浮かび上がり、ヘルダーリンはゆっくりと床を踏みしめながら待機している大型ヘリのもとへ向かった。

ディルガン流通管理局　上空

「間も無く降下ポイントに到着だ。用意はいいかボウズども？」

ヘリのパイロットである４０代前半の男が、ハンガーに吊されたヘルダーリンとライデンの中にいるエリオたちに通信を送る。

「はい！！」

「了解です！！」

ヘリパイロットの付けていたヘッドセットから、エリオとキャロの威勢のいい返事が響く。

「よぉし、いい返事だ！
降下ポイントに到着。さあ、無事に帰ってこいよ！」

ヘリは降下ポイントであるハイウェイに到着、エリオとキャロに激励の言葉を贈ると共にハンガーからライデンとヘルダーリンを切り離す。

「くっ…」

ライデンとヘルダーリンは降下中のＧに耐えつつ、しきりにブーストを行いながら着地時の衝撃を緩和した。

「よし、行くよ…キャロ！！」

「うん！！」

ライデンとヘルダーリンは互いに通信を送り、互いに鼓舞し合った。

『敵ＭＴ中隊、ハイウェイに展開しています』

『ヘリ部隊も確認。迎撃しましょう』

ライデンに搭載されたＡＩ「ストラーダ」とヘルダーリンに搭載されたＡＩ『ケリュケイオン』がそれぞれの主に言う。

「わかったよ、ストラーダ！」

「ケリュケイオン、サポートお願いね！」

エリオとキャロがＡＩにそう口にすると同時に、ヘルダーリンとライデンはブースターを点火、一気にハイウェイを駆け敵部隊に切り込む。

ライデンはフロート脚独特の高い機動性を生かし、右手のマシンガンで次々にヘリを落としていく。

またヘルダーリンも負けておらず、逆脚型特有の高い跳躍力でぴょんぴょん飛び跳ねながら翻弄し、右手のバズーカと左手のガトリングマシンガンによる高火力で一気に畳み掛けていった。

敵はいなくなった。　ライデンとヘルダーリンはそのまま背中のカバーを開く。

そして、そこから高出力のバーニアの炎が噴き出し二機を進行方向へと猛スピードで飛ばしていく。

「この分だとすぐ終わりそうだね」

ヘルダーリンと共にハイウェイを駆けるライデン。

『間もなく、管理局主要部へ到達します』

ライデンとヘルダーリンに搭載されたＡＩが、自らを操る主に情報を送る。しばらくダッシュを続けているとハイウェイを抜け、地下トンネルに到達した。

「…ここからだね…まだ敵反応が残ってる」

「エリオ君、気を引き締めよう」

二機は互いに通信を送ると地下通行路に続くゲートを開く。そして、警戒しながらゆっくり前進していく。

しかし二つ目のゲートを開くなり、いきなりＭＴの襲撃を受けた。各勢力で多く使われる「オストリッチ」と呼ばれるタイプのＭＴだ。

「勝てないのなら出て来ないで下さい！！」

ライデンはＭＴたちから放たれた数発の銃弾を受けつつも、左手のレーザーブレードを振るいＭＴの一体を切り伏せ、右手のマシンガンで残りのＭＴを蜂の巣にする。

ヘルダーリンもまた、冷静に左手のガトリングマシンガンを連射しＭＴたちを鉄クズに変えていった。

「片付いたね…」

怪訝そうに呟くヘルダーリン。

「うん、なんだか警備がおざなりな気もするけど…先に進もう」

ヘルダーリンからの通信にライデンはそう返しつつ、レーダーにも視線を目配せしながら先へ進む。

そして、二機は最後の関所に通じるゲートを開いた。

その先には……全身が紫色に彩られ、右肩の主砲と呼ばれる大口径エネルギーキャノンを始めとしたビーム兵器で全身を固めた重量逆脚型ＡＣが待ち構えていた。

『やっと来たか…』

紫色のＡＣはライデンとヘルダーリンの姿を確認すると、二機に向かって通信を送る。

「あいつは…ライウン！？」

エリオはモニターに写った紫色のＡＣを見るなり思わず声を上げた。

『命令だ、死んでくれ！』

しかし、紫色のＡＣは言うが早いかブーストをふかし左腕のデュア

ルレーザーライフルを二機に発射する。

「っ！　散開！！」

言うが早いか、ライデンが叫ぶと同時に二機は同時に散らばる。

『敵ＡＣを確認、ストラックサンダーです。
敵は多数のビーム兵器を装備、特に高火力の肩武器の直撃による熱暴走は危険です。
機動力を生かした戦闘スタイルが有効でしょう』

『敵ＡＣを確認。ライデンとヘルダーリンです。
敵機は高い連携力を持っています。まずは比較的装甲の薄いライデンを叩くのが有効でしょう』

互いのＡＣに搭載されたＡＩが敵の情報を叩き出す。

「くらえ！！」

ライデンがフロート脚の高い機動力を生かしながら右手のマシンガンを乱射、その後に続く形でヘルダーリンがバズーカを放つ。

『ふん、まだトロいな』

しかし実弾防御を高めたストラックサンダーにはマシンガンをものともせず、逆脚型特有の高いジャンプ力を生かしながら右手のレーザーライフルと左手のデュアルレーザーライフルを連射する。

「くっ…やっぱり雷雲の名は伊達じゃないってこと…？」

ヘルダーリンはまだ慣れないながらも、ブーストをバズーカとガトリングマシンガンをストラックサンダーに連射しつつ毒づく。

その、時だった。

突然、ライデンに気を取られていたはずのストラックサンダーがヘルダーリンに狙いを定め、オーバードブーストを用いながらヘルダーリンに急接近してきたのだ。

「嫌っ！？　こ、来ないで！！」

突然の事態に驚愕するキャロ。　動揺しながらストラックサンダーにバズーカやガトリングマシンガン、ロケットを連射する。

「っ！！　キャロに手を出すな！！」

ライデンもまた背後から追い掛けるが、総火力瞬間火力共に乏しいライデンではストラックサンダーに大したダメージを与えられなかった。しかし、ライデンはそれでもマシンガンとミサイルを吐き出し続ける。

『…死ね！！』

不意に、ヘルダーリンの眼前まで迫ったストラックサンダーの主砲が煌めいた。その瞬間…主砲から放たれた高エネルギーの砲弾が至近距離でヘルダーリンの胸部を貫いた。

『い、イヤァァァァァァァァッ！！！』

ストラックサンダーの主砲によって胸部を貫かれた瞬間…キャロの

絹を裂くような悲鳴が戦場にこだまする。
そして……ヘルダーリンは盛大に爆散、周りにはそれのなれの果てである鉄クズだけが残った。

「キャロ…？　キャロォォォォッ！！！」

自分の仲間が殺されたのを、エリオは未だに信じることが出来なかった。
モニター越しに爆散したヘルダーリンを見て、エリオは愛する者の名を叫んだ。

「…見誤ったか…やはりこんなガキがジャックや豆狸の探す者ではないということか」

変わり果てたヘルダーリンから離れ、ストラックサンダーはキャロが死んだショックで動きを止めていたライデンに狙いを定める。

『お前も…あがくなッ！！』

ブーストを点火、動きを止めたままのライデンにストラックサンダーが襲い掛かる。

「貴ッ様ァァァァァァァァ！！！」
すると突然、ライデンが叫びながらオーバードブートを
を行い、ストラックサンダーに急接近する。

『なに！？』

ライデンの突然の行動に驚愕するライウン。慌てて我に返り、自分

の持つ武器をライデンに乱射する。

「おまえぇぇぇぇぇ！！！」

しかしライデンは被弾も辞さない覚悟で命中しながらストラックサンダーに肉薄、左手のレーザーブレードが閃く。

しばしの、静寂。

ライデンとストラックサンダーは、かなり近い位置でただ立ち尽くしていた。　しかし、ストラックサンダーの胸にはライデンのものと思しきレーザーブレードの蒼い光の刃が飛び出ていた。

そして、しばしの間を置いてライデンは仇の胸に突き刺したレーザーブレードを抜く。
それと同時に、ストラックサンダーは糸の切れた人形のように、そのまま大地に仰向けに倒れこんだ。

「……」

エリオは、自分の愛する者を殺した仇であり、すでに動かなくなったストラックサンダーを何の感情もない瞳で見下ろしていた。

その時、ライデンのレーダーに新たな敵反応を示す光点が二つ現れた。

「っ！！」

ライデンを再び起動させる。そして、レーダーの反応があったほうに機首を向けた。

そこには、バケツのようにも漢字の（興）にも見える頭部を持った白銀と薄い灰色混じりの蒼のカラーリングがなされた重量二脚型のＡＣがいた…そして、そのＡＣはライデンを見据えた。

「結果は初めから見えていたが……やはりか」

動かなくなったストラックサンダーを見下ろしたのち、溜め息混じりに呟く謎のＡＣ。

「待て…ジャック・Ｏ！！」

ライデンはマシンガンを向け、そのＡＣ「フォックスアイ」に叫ぶ。

「…エリオ・モンディアル……君の若さと甘さは致命的な弱点だ。今のままでは、今度は君が彼女と同じ運命を辿ることになるぞ」

しかし、フォックスアイは溜め息混じりの声でライデンに通信を送ると、背部に装備していたフロートウイングを起動させ、高速でその場から飛び去っていった。

無論ライデンも追い掛けようとしたが、いくら機動力の高いフロート脚でも空中戦を主体に設計されたフロートウイングのスピードに

追い付けるわけもなく、そのままフォックスアイを取り逃がしてしまった。

「畜生…どうして僕は…くそったれがぁぁッ！！」

誰もいない戦場の中、エリオはフォックスアイが逃げ去っていった西の空を見上げながら慟哭を上げた。

かくしてディルガン流通管理局の攻防戦は、キャロ・ル・ルシエの戦死という犠牲を払いながらもアライアンスの勝利という形で幕を閉じることとなった。

キャロ・ル・ルシエ及び、ライウンの死亡を確認。

ウィッチリストから削除を行います

ＭＩＳＳＩＯＮ０１：魔導師　―ウィッチ―（後書き）

ライウン先生とキャロ・ル・ルシエに、哀悼の意を……

ＭＩＳＳＩＯＮ０２：代価　―ライフ・バウンティ―（前書き）

待たせたな……言葉は不要か

今回でようやくリムとズベンたちの登場です

MISSION02：代価　―ライフ・バウンティ―

アライアンス本部　格納庫

「…キャロ……どうして…」

エリオはただコクピットに腰掛けたまま、自分のパートナーであるキャロを守れなかったことに苛まれていた。

そしてその手には6万コームの金額が書かれた小切手が握られていたが、正直エリオは金などどうでも良かった。

なぜならこれは、エリオが倒したバーテックスのウィッチの一人であるライウンにかけられていた賞金であり、キャロの命の値段と同義であったからだ。

「――ふざけるな……」

エリオは心からの呪詛を誰も聞こえない程度の声で呟いた。

自分の大事な仲間が殺されておいて弔いもせず、しかもその代価がライウンにかけられた6万コームの賞金だったのだ…怒らずにはいられないだろう。

「…エリオ君、ちょっといいかしら？」

憎しみに震えていたエリオ。そんな時、背後から優しげな女性の声が響いた。

「……プリンシバルさん」

そこにいたのは、やや癖のかかった紫色のセミロングの女性がいた。彼女の名はプリンシバル。エリオやキャロと同じくアライアンス戦術部隊に身を置く元管理局々員のウィッチだ。

「…キャロちゃんのことは残念だったわね…」

プリンシバルはエリオの隣に腰掛けながら、できる限り優しく声をかけた。

「……変な同情はやめてください。
僕だってキャロの仇は必ず取ってみせる……そして、バーテックスの奴らは皆殺しにするつもりです」

エリオは恐ろしく底冷えするような声でプリンシバルを睨み付けながらそう口にする。しかし、プリンシバルは臆することなく真摯にエリオと向き合いながら、口を開いた。

「よく聞いて、エリオ君。　復讐って言うのは麻薬と同じなのよ。
貴方がいくらバーテックスの奴らを皆殺しにしても、キャロちゃんは戻ってこないわ……」

「じゃあ、このまま奴らを見逃せと言うんですか！？
あいつらを笑って許せというのか！！！」

プリンシバルの言葉にエリオは激昂し、感情のままに怒鳴り散らした。

「違うわ…バーテックスが倒さなければならない相手は事実だけれど、復讐なんかしても虚しくなるだけなの。
貴方が本当にすべきことは……最後の最後まで足掻いて足掻いて、生き残ることよ。
それが、キャロちゃんや死んでいった人達に対する一番の手向けよ」

プリンシバルはエリオの肩を抱きながら、幼子に言い聞かせるようにそう返す。

「…生き残る…僕は、キャロの…為に……」

プリンシバルの言葉に、エリオは漸く落ち着きを取り戻した。

「落ち着いたみたいね…それじゃ、早速次に行きましょうか」

「…はい」

プリンシバルはエリオの頭を撫でつつ宥めた。そして、二人は次の作戦の受領に向かった。

……それが、二人のラストミッションになるとも知らずに。

旧聖王教会・バーテックス本部

「……」

聖王教会の一室、少し荒れたバロック様式の部屋の中で一人の男がパソコンを眺めていた。

金髪混じりの短い髪に虹彩異色の瞳、容姿的には日系アメリカ人で年の頃は２０代後半か３０代前半と言ったところか。

「エリオとキャロ、そしてライウンは死んだか…」

男は目頭を軽く揉むと、エリオとキャロ、ライウンの顔写真が絵柄のトランプカードを破り捨てた。

この男こそが、はやてと共に世界に反旗を翻したバーテックスの首領「ジャック・Ｏ」なのである。

ジャックがアライアンスの発表した賞金首のリストを流し見していたところ、ある一人の画像が目に入った。

「ユウジ・ナルミ、元管理局の一陸士……。
ウィッチとしては駆け出し同然…だが、一応私の計画の候補者として入れておくか」

ジャックは小さくそう返すと、パソコンからあるアドレスを２つ呼び出しおもむろにキーボードを叩き始めた。

「…さて、彼はどうなることやら」

ジャックはそう呟くと席から立ち上がり、再び部屋を後にした。

同刻　ブラームス

常に緊張状態に置かれているクラナガンとは違い、ブラームスは長閑そのものだった。

「お、みんな！　お兄が戻ってきたよ！」

「あ、ホントだ！！　おーい！！」

村の子供たちに混ざって遊んでいたリリアたちが、村の門から見えた蒼いＡＣ……ユウジの愛機であるフレアライルを見て元気よく手を振った。

「おう、みんなただいまだぜ！」

フレアライルの外部スピーカーからユウジの声が響き、手を振っている子供たちに向けて器用にＶサインを送った。

「ふう…意ッ外と疲れるもんだなぁ」

フレアライルは村の道を歩きながら自分の家であるガレージに辿り着き、ＡＤＡのサポートでゲートを開き機体を簡易ハンガーに固定させた。

「よっと」

シートベルトを外し、ユウジは愛機のコクピットを離れた。

「お疲れ様でしたユウジ。今回の点数は…大目に見て５４点と言ったところでしょうか」

首にかけられた翡翠のペンダントが明滅しながら、ＡＤＡが辛辣な一言を口にした

「おいお～い、そりゃないぜＡＤＡ…あれでも頑張ったんだぜ？」

「まだ荒削りしすぎです。このままではこの先生きのこれません」

ＡＤＡの辛辣過ぎるコメントにユウジはやや不満げに口にしたが、さらにＡＤＡの追い討ちがかかった。

「ぶー…まあしゃあないか」

近くのコンテナに腰掛け、寝転がりながらそう呟くユウジ。

「おかえり、お兄！！　どうだった？」

「がうっ」

すると、広場で子供たちと別れてきたリリアが三メートルほどの小さな竜を連れながら帰ってきた。

「お、リリアにりゅう子か。成果は上々ってとこだ、ほら」

そう言いながら、リリアにバーテックスから支払われた報酬金の入

ったケースを渡す。

「さてさて、どれくらいかなー？」

リリアは期待に胸を膨らませながら、そのケースを開いた。
その中には、先ほどナイアー産業区において未確認武装勢力を撃破した報酬である８万コーム分の紙幣が入っていた。

「おっ、まあまあじゃない♪　これで一週間分位は持つと違う？」

ケースの中に入っていた紙幣を見るなり、リリアは目を輝かせながらそう口にした。

「へへっ、だろ？」

嬉しそうに口にするユウジ。

「うんうん、さっすがあたしのお兄だぞっ！　天国のお姉もきっと喜んでるはずだよ。
それじゃお兄、機体の整備は私に任せてゆっくり休んでるといいよ！」

リリアはそう返すと、慣れた様子で工具箱を携えＡＣハンガーへと走り去っていった。

「…さてと、じゃ少し寝るか……」

ユウジは頭を掻きながら、自分の部屋へと消えていった。

４５分後　ミッドチルダ南西部　ルガ峡谷

ここはルガ峡谷。ミッドチルダの中でも緑がかなり少ない地域にある、荒涼とした渓谷だった。

ここはアライアンス本部が置かれたクラナガンとバーテックスの本拠地である旧ベルカ自治領聖王教会に通じる最大のルートであり、同時にアライアンス最大の輸送路なのだ。

その空域に、二機のＡＣを抱えた一機の輸送ヘリが近付いていた。

「作戦ポイントに到着、ＡＣを投下する」

もはや聞き慣れた、ヘリパイロットからの通信。

ヘリからＡＣが橋に投下された。

一機はビームマシンガンとレーザーブレード、小型スラッグガンにミサイルというバランスの取れた武装を施された紫色のＡＣ「ヘブンズレイ」。

一機は蒼と白を基調としたトリコロールカラーに、今や知らない者はいないとされる著名な高エネルギーライフル「カラサワ」にロングレーザーブレードを装備し、右肩に大口径チェーンガンとリニアキャノンで武装した重量二脚型ＡＣ…スバル・ナカジマの駆る「サイレント・ゼフィルス」であった。

「始めましょう、スバルさん」

「了解っ！」

互いに橋梁に着地する二機。
空中には、拠点防衛用の無人型ガードメカとホバーブーストを装備した逆脚型ＭＴが展開していた。
展開していた部隊は、ＡＣが投下されたと同時に攻撃を仕掛けてくる。

「邪魔だぁぁ！！」

ゼフィルスは叫びながら重量二脚型とは到底思えないほど高い機動力を見せ、充実した火力を生かした猛攻撃で空中に展開しているガードメカとＭＴを確実に撃破していく。
「この程度で、笑わせてくれますね」

対するヘブンズレイはゼフィルスとは対処的にビームマシンガンを高威力単発モードに切り替え、冷静かつ的確にガードメカとＭＴを叩き落としていく。

対する敵部隊たちも二機のＡＣに果敢に挑むが、火力も装甲も貧弱なガードメカやＭＴが破竹の勢いＡＣを止めきれるはずもなく、展開していた敵部隊は僅か１０分で全滅してしまった。

『周辺にエネルギー反応なし。敵部隊の全滅を確認しました。
お疲れ様です、相棒』

ゼフィルスのコクピット内部、搭載されたＡＩが主であるスバルに告げる。

「今日は簡単だったね…」

ＡＩからの報告を聞いたスバルは、ヘルメットを取りながら軽く目頭を揉む。

「お疲れ様です、スバルさん。お見事でした」

ゼフィルスのモニタに、青い髪を持ったいかにも誠実そうな青年の顔が映し出される。

「いやいや、ジャウザーさんもスゴかったですよ」

スバルは軽く笑みを浮かべながらその蒼髪の青年「ジャウザー」に返した。

「作戦目標は達成されたことですし、私達も帰還しましょう」

ジャウザーはモニタの向こうのスバルにそう返しながら、回収要請の信号を打診した。

同時刻　ミッドチルダ北部　ベルザ高原

ここはベルザ高原。かつては北部有数の放牧地兼牧草地帯だったが、今は特攻兵器の襲撃により廃れてしまった地だ。

その地を、ＡＣ二機を搭載した輸送ヘリが護衛の戦闘ヘリ三機を連れ前線に向けて飛んでいた。

ヘリに搭載されていたのはエリオの駆るライデンと、上半身を白と黄色がかった白、下半身のフロート脚が蒼白に塗り分けられたカラーリングに、両手にマシンガンとスナイパーライフル、両肩垂直ミサイルポッドで武装されたフロート型ＡＣ……プリンシバルの愛機「サンダイルフェザー」であった。

しかし突然、遠距離からヘリに向かって砲撃が放たれ、それに直撃したヘリは大きなダメージを負いバランスを崩してしまった。

「直撃！？　皆、墜落するぞ！！　衝撃に備えろ！！」

ヘリパイロットがコントロールの聞かない機体を必死に操りながら、搭載された２機のＡＣパイロットに叫ぶ。

しかし、このままではいずれ墜落しＡＣもろとも大破してしまうのが関の山だ。

ヘリパイロットは即座に機体の体勢を出来るかぎり直しつつライデンとサンダイルフェザーを投下、そのまま不時着した。

「気をつけて、エリオ君！　来るわよ！！」

プリンシバルの駆るサンダイルフェザーから、エリオのライデンに叱責が飛ぶ。

彼方から、２機のＡＣが飛来してくる。

紫色カラーリングに両手にビーム式と実弾式二つのスナイパーライフルとマルチミサイルで武装されたと軽量逆脚型ＡＣ「サウスネイル」と、昆虫のような四本足が印象的な、全身にあらゆる拡散系武

装が施された黄色と黒の迷彩塗装の四脚型ＡＣ「バレットライフ」だ。

「へへっ、こんなとこで賞金首が引っ掛かるとはな」

サウスネイルのコクピットの中で、紫色の髪をもったどことなくお調子者の気がありそうな青年……「ズベン・Ｌ・ゲヌビ」はライデンとサンダイルフェザーを見ながらそう口にする。

「無駄口を叩くなズベン。潰すぞ」

ズベンの言葉に、燃えるような真っ赤な髪をした吊り目の若い男「リム・ファイアー」はただ短く、それだけを返す。

「へいへい、分かってまさぁね旦那」

そう返すとサウスネイルとバレットライフは一斉にブーストを点火し、そのまま猛スピードでライデンたちに接近していく。

「フン、あなた達いい度胸ね！　私たちに逆らおうなんて」

「死ね…薄汚い金の亡者どもが！！」

エリオのライデンとプリンシバルのサンダイルフェザーが同時に駆け出す。

「さって、んじゃまずは小手調べっと」

逆脚型特有の高いジャンプ力を生かしながら、サウスネイルの右肩に搭載されたミサイルポッドからエクステンションの連動ミサイル

と共に六発のミサイルが吐き出される。

「ふっ、嘗められたものね私も」

サンダイルフェザーはそれを冷静にかわし、左手のスナイパーライフルを構
え、サウスネイルとの狙撃戦を始める。

高い滞空能力を持ったサウスネイルと、フロート脚特有の高い機動力を持ったサンダイルフェザーの撃ち合いは白熱したものとなっている。

「っ…なかなかやるじゃない」

プリンシバルは毒づき、サンダイルフェザーは両肩の垂直ミサイルをサウスネイルに放つ。

「アブねッ！？」

デコイを数発ばらまき、ミサイルを逸らす…が、デコイから逃れた数発がサウスネイルに直撃し態勢を崩してしまう。

「このまま…！！」

好機とみたサンダイルフェザーはそのままマシンガンとスナイパーライフルによる弾幕をサウスネイルに浴びせかける。

「っ…こいつぁマジでヤバいぜ」

軽量逆脚ゆえの高い機動力を生かしながらサウスネイルは回避行動

を取る。
装甲が薄いために、先ほどの一撃でも致命傷になっているからだ……慎重に動かなければならない。
「相手が悪かった、そう言うことね…」
自分の勝利を確信するプリンシバル。
ブーストしながらサンダイルフェザーをそのままサウスネイルに肉薄する。
しかし、それは叶わなかった。
彼方から放たれた一条のレーザーが、サンダイルフェザーのコアを貫いたからだ。
「く…まさか、もう一体……！！」
炎上するサンダイルフェザーのコクピットの中でプリンシバルがそう毒づいた瞬間、彼女は愛機もろとも盛大に爆発した。
「はぁ…助かったぁ。遅いんだよ、お前は」
崩れ落ちたサンダイルフェザーを一瞥し、サウスネイルは彼方にいた新たなＡＣの機影を見て通信を飛ばした。
「ごめんなさぁい、私だって忙しいんですよぉ～☆」
ズベンの耳につけたヘッドセットから、甘ったるい女性の猫なで声が響く。それと同時に、そのＡＣがサウスネイルに近づいてくる。
それは、リムのバレットライフと同じく四脚型の脚を持ち、手にゲテモノじみた巨大なライフルを持った銀色のＡＣ「シルバニア・ス

パイディー」だった。

「ですけどぉ～プリンシバルなんて雑魚に苦戦するあなたもあなたですよねぇ、ズベンさん？」

シルバニア・スパイディー（以下ＳＰとする）のコクピットの中にいたのは、栗色のセミロングの髪をした若い女性「クアットロ」だ。

クアットロは相変わらずの小馬鹿にしたような声でズベンに言った。

「うるせぇな、今日は調子が悪ぃんだよ…いつもならあんな奴、マッハで蜂の巣にできんだよ」

ズベンは機嫌を悪くしながらヘッドセットの向こうのクアットロに返した。

「はぁ～い、それではそうということにしま～す。それよりぃ、リムさんはどうしますかぁ？」

「旦那なら大丈夫だろ、手出しはするなとさ」

クアットロの問いに、ズベンは終始苛ついたまま返しながら自分のＡＣを後退させた。

「「死ね！！」」

一方で、エリオのライデンとリムのバレットライフの戦いはまだ続

いていた。

だが、ライデンの攻撃にはいつもの正確さが見てとれなかった。唯一の主力武装であるマシンガンも極端に命中率が悪くなっており、スピードを生かした撹乱戦法も突撃主体という完全な玉砕型になってしまっていた。

「クソ、どうして当たらない！？　墜ちろ、墜ちろ！！　墜ッちろ！！」

キャロの死を目の当たりにしたせいで精神的に不安定になっているエリオに冷静さがあるわけでもなく、ライデンの主武装であるマシンガンも命中率が極端に下がっていた。

対して、バレットライフは相変わらず滑るように移動しながら両手のフィンガーバルカンをばらまき、ライデンの装甲を大きく削りとっていく。

「う、うわぁあッ！！！」

バレットライフから繰り出されるおびただしい弾幕の雨に、ついにライデンの脚部が爆発を起こし大地に落下した。

「しまった！？　くっ…お願いだライデン、動いてくれ！！　頼む！！」

エリオは必死に操縦桿とペダルを踏みながらライデンを動かそうとするが、脚部の反重力装置と駆動系を破壊された今のライデンに動くことは出来なかった。

「最後に何か言い残すことはあるか？」

バレットライフが、身動きの取れなくなったライデンのコアに右手のフィンガーバルカンを突きつける。

「…糞が…薄汚いカネの亡者の癖に！！
貴様らウィッチのせいで、キャロは死んだんだ！！」

エリオはコクピットからバレットライフに向け、そう叫んだ。だがそれは、明らかな責任転嫁でしかなかった。
キャロを殺したのはリム・ファイアーではなくあくまでもライウンだ。
しかしエリオには、自分以外のすべてのウィッチが悪としか認識出来ていなかった。

「…図に乗るなよ餓鬼が。俺は異能者や仮面ライダーどもの次に、お前のような理想に溺れた戯言を抜かす奴らが大嫌いだ！！」

リムは激情を隠さず、エリオに怒鳴り散らした。
「くっ…売国奴が！！　人々を無為に泣かすしか出来ないクソったれがぁ！！
お前らなんか、皆僕が殺しつくしてやる！！　殺してやる！！」

だが、狂気に捕らわれたエリオには何も通じていなかった。

「足掻くな！　お前もあの小娘のもとへ送ってやる」

リムはエリオにそう返しながら操縦桿のトリガーを引く。その瞬間、バレットライフがライデンのコアに突き付けられていた右手のフィンガーバルカンが至近距離で火を噴いた。

高機動戦を得意としたライデンの装甲は、お世辞にも厚いとは言えない。
フィンガーバルカンから繰り出される鉛弾の嵐が装甲を喰い破り、次々にコクピットのエリオに押し寄せる。

エリオは声にならない叫びを上げながら弾丸に体を引き裂かれ、ミンチにされていく。

１０秒ほど経って、バレットライフのフィンガーバルカンの弾丸が切れた。
ライデンのコアにはおびただしい数の弾痕が刻まれ、その中にはエリオだった肉片が辺りに散乱していた。

「…また一人、ウィッチを倒したよ…父さん。
…必ず、俺が無念を晴らしてみせる…。
全ての魔導師とウィッチを…仮面ライダーと、ウルトラマンを血祭りに挙げて……！！」

バレットライフのコクピットの中、リム・ファイアーは強い憎悪の意志が籠もった瞳でそう呟いた。

リム・ファイアー。

現在までに生き残っているウィッチの中で、最も危険な男。

彼もまた、何の前触れもなく起きたあの事件の被害者なのかもしれない……。

プリンシバル、エリオ・モンディアル、死亡。

バーテックスの総攻撃予告時間まで――あと２０時間３９分。

ＭＩＳＳＩＯＮ０２：代価　―ライフ・バウンティ―（後書き）

「俺はウィッチの存在が憎い！
魔導師が憎い！
ウルトラマンが憎い！
仮面ライダーどもが憎い！
全ての異能者どもが憎い！
奴らの存在を全否定するため、敢えて俺はウィッチになったのだ！」

――リム・ファイアーの独白より

ＭＩＳＳＩＯＮ２．５：過去　―パスト―（前書き）

―――殺意の大地に種を蒔く

MISSION2．5：過去　―パスト―

夢を、見ていた。

とおい、とおい、平和な時の記憶。

いにしえの鋼の巨人が目覚める前の、変わらない日常。

今となっては、もう戻らない日々――。

九年前　ミッドチルダ　クラナガン　地上警邏部隊第7分署　地域課

「特務六課、フッケバインを摘発か…」

書類や私物が乱雑に詰まれたデスクに脚を掛けながら、一般局員の制服を着た一人の青年が新聞を広げていた。

その青年の名は、ユウジ・ナルミ一等陸士。　代々時空管理局に勤める名家の次男坊だ。

その輝かしいステータスからすれば、とっくに尉官クラスになっていてもおかしくはないはずだった。
だが、彼はエリートコースを歩むどころか最低辺とも言える一等陸士に留まり続けていた。　そして、功名心の乏しいユウジ自身も表にこそ出してはいないが僅かながらの不満を内に抱いていた。

理由は簡単だった。
ユウジの魔導資質と魔力量がほぼ皆無に等しかったのと、彼の両親がすでに逝去しているからだ。
管理局は優秀な魔導資質を持った人材を欲している。
その膨大な世界を纏める役割を持っているが、その世界の数に対して極端に人手が少ない。ゆえに四六時中自転車操業なのだ。

そして、ミッドチルダに在住する一部の魔導資質持ちの間には未だに選民思想が根付いている。

魔導資質がないというだけで彼は蔑まれ、罵倒され続けた。そして気付けば、いつの間に地上の警邏部隊という肥だめに捨てられていた。

その一方で、長女と二女は類い希なる才能に恵まれ、賞賛され続けた。

そんな環境に長年挟まれ続け、彼が二人を妬まないはずがなかった。

なぜだ、何故なんだ。

何故、俺だけが。

何故、姉貴とリリアが。
何故、魔法が使えないというだけで差別する？
何故、蔑まれなきゃならない？

ユウジは何度も自問した。しかし答えは見つからなかった。
出世はともかく、彼は両親と同じ有名な魔導師として大成したかったのだ。
出来うる限りの努力はした、常人から見れば血反吐を吐くような修練もこなし続けた。
しかし、そんなユウジの努力を嘲笑うかのようにそれらは全て不発に終わってしまった。

事実、彼の姉であり「白銀の戦神」の二つ名を持つサクヤ・ナルミ執務官に至ってはほぼ絶縁状態に等しく、今は１５歳の妹との二人暮らしだった。

「よ、ユージ。飯食いに行こうぜ」

ふと、ユウジが物思いにふけっていると背後から同僚に声をかけられた。
そこにいたのは、やや癖のかかった黒い髪に軟派そうな顔立ちをした青年だった。

「お、モリか。そだな、行こうか」

ユウジはいつも通り、軽い様子で青年「モリ・カドル」に返すと、二人はそのまま昼食をとりに事務室から去っていった。

「…しっかし、ウルトラマンに仮面ライダーがまさか実在していたなんてなぁ」

ふと、ユウジがチーズカツをつつきながら呟いた。

「なんだよ、藪から棒に」

白米をかきこみながら、モリが怪訝そうに問うた。

「イヤな、大分前から辺境の管理世界やミッドに怪人やら怪獣が現れるようになっただろ？
まさか本物のヒーロー様を見れるとは思わねえっしょ」

味噌汁の入った椀を片手に、ユウジはモリに返した。

「お前はいいよな、そうやってノーテンキに構えられてさ。
俺はあいつらが怖ぇよ」

モリは少し呆れたようにユウジに返し、ソースとマヨネーズを程よくまぜた千切りキャベツを口にする。

「考えすぎだぜモリちゃんよ。
あいつらは確かに強大な力を持ってる、だけどそれは弱き者たちを守るために力を振るってんだ。　それに、あいつらだって望んでその力を手にしたわけじゃないからな。
その証拠に、今まで俺達を助けてきてくれたじゃないか」

傍らに置かれたお冷やの入ったグラスを傾けながら、ユウジはモリに言った。

「そう言うものなのか？　まあ、俺達は俺達の仕事をこなすだけだしな」

「ハハハ、違いねぇ」

モリの言葉に、ユウジは半ば笑いながら返した。
昼食を早々に食べ終え代金を払うと、二人は足早に職場へと戻っていった。

変わりない日常、変わりない世界。　この時はまだ、誰もが思いもしなかったはずだ。

世界の終焉が、間近に近付いていたことに。

翌日　午前１０時　ナルミ家

「ふあぁ…ダルい」

「ちょっとお兄、しっかりしなよ…自分、恥ずかしいぞ」

とあるマンションの一角、ユウジは妹のリリアと共に朝食を取って

いた。

『続いてのニュースです。7年前にコイロス地方にて発見されたマルディラ遺跡ですが、本日管理局がキサラギ社とスクライア一族との合同での調査を行うとの声明がなされました。
このマルディラ遺跡は、現在まで我々が知り得ている技術を大きく上回る超古代のオーバーテクノロジーが眠っていると見られ、今後の調査の進展が待たれます…』

リビングに置かれたテレビのニュースに耳を傾けながら、ユウジとリリアは朝食を平らげていく。

「お粗末様でした、と」

朝食を食べ終えたユウジとリリアは互いに両手を合わせ、食器をキッチンに運んでいく。

今日はユウジが久しぶりに取った休暇の日である。　退屈な日常を少しでも楽しむ為の必要な手段であったが。

「お兄、準備できたー？」

「あ、ああ。もちろんなのぜ」

物思いにふけっていたユウジだが、キッチンにいたリリアの声で我に返った。

「よし！　じゃあ弁当も準備出来てるし、いざぁ出発だぞっ！！」

「あいあい、じゃ行きますか」

リリアはいつもと変わらぬ笑みを浮かべながらユウジに返し、二人はそのまま玄関から部屋を後にした。

しばらくたって、二人は地下駐車場に停めていた愛車のジープに乗り込んだ。

ユウジは慣れた様子でキーを差し込みエンジンを起動させると、ギアを入れながらアクセルをごく軽く踏み込み、出口に向かう。

その瞬間だった。

赤い何かが空から猛スピードで落下し、近くの道路に激突すると同時に爆発を起こしたのだ。

「な、何！？
今のは一体…！？」

リリアとユウジはその爆発を見て思わず驚いてしまう。

「…リリア、少しここで待ってろ。様子を見てくる」

「う、うん…」

リリアにそう言い残し、ユウジはジープから降り爆発が起きた箇所に向かう。

「えー、時空管理局の者です。皆さん、危険ですので離れて下さい」
ユウジは何かが落下した場所にいた民間人たちに指示しながら、端末を取り出し職場に連絡をかける。
「え、こちらナルミ一等陸士です。本部、本部、聞こえますかー？どうぞ」
『ザ…ザッ、こちら第七分署！　現在多数の所属不明機に襲われ…ザザザッ』
漸く職場に繋がったと思った瞬間、爆音と慌てふためく局員の悲鳴をバックに通信士がスピーカーから聞こえた瞬間、激しいノイズと共に通信が断絶された。

「…本部？　本部聞こえるか？　本部、応答しろ！！」
ただならぬ不安を抱えたまま、ユウジは何度も通話を試みる。しかし、何度やってもスピーカーからはノイズしか響かなかった。
「おい、あれ…」
突然近くにいた民間人の男性がいきなり空を向けて指差し、ユウジもつられてその先を見上げる。
そこには、信じられないものが写っていた。
「何だ、ありゃ…！？」
空の彼方から、先ほどのナニカに似た無数の大きな赤い飛蝗のよう

な物体が猛スピードでこちらに向かってきていた。

「やべぇ…みんな地下に逃げ込むんだ！！　急げ！！！」

ユウジは慌てて、近くにいた民間人に促し地下駐車場へ誘導する。

それと同時に赤い飛蝗は雨霰のように降り注ぎ、凄まじい轟音を上げながら次々に激突、爆発していく。

「お兄、いったい何があったの！？」

「リリア、地下に逃げ込め！！」

車から降りてきたリリアがユウジに問うが、ユウジは慌ててリリアを担ぎ上げたまま民間人と共に近くにあった駐車場の物置に潜り込み、ドアを閉めた。

旧暦時代の負の遺産が、平和という麻薬に溺れた人々に牙を向いたのだった。

ミッドチルダは、おぞましいの地獄さながらの状態に陥っていた。

空から降り注ぐ大量の赤い飛蝗は次々に爆発し建物を破壊しつづけ人々を焼き払い、さらには辺りの大地を焼け野原へ変えていった。

「嫌だ、父さんも一緒に逃げるんだ！！」

「…すまんなリム、だが俺は…局員として皆を守らなきゃならないんだ」

とある市街地の一角のシェルターの入り口で、黒い髪の壮年の男と燃えるような赤い髪の少年がいた。

「いやだ！！　母さんが死んで父さんまで死んだら、俺はどうすればいいんだ！！」

赤毛の少年「リム・ファイアー」は涙ながらに父である壮年の男「ピン・ファイアー」に言う。

「心配するな…俺は死なない、必ず生きて帰ってくる。父ちゃんがお前の約束を破ったことあるか？」

ピンはその嗄れた手でリムの頭をわしわしと乱暴に撫でる。

「じゃあ、行ってくる。バレットライフ！！」

―ｇｕｔ．ｉｔ　ｂｒｏｔｈｅｒ―

ピンの首に掛けていた薬夾型のペンダントが音声を発し、剛健なアーマーに大量の重火器を引っさげた姿に変わる。

「父ちゃああぁああん！！！」

リムの悲痛な叫びを聞きながら、ピンはそのまま空に駆け出した。局員としての使命と、たった一人の肉親である息子を守るために。

あれから、どれだけの時間が過ぎたことだろうか。
止まることなく続いていた爆音と悲鳴は、すでに消えていた。
「…終わった、の？」
ユウジの胸に収まっていたリリアが、不安そうにユウジに問い掛けた。
「分からん…とにかく様子を見てくる。ここを動くんじゃないぞ」
ユウジはリリアと民間人にそう言い残すと避難用通路から飛び出し、地下駐車場の出口に向かって走り出した。
「……なんだよ…これは…。
一体、一体何が…？」
外に出たユウジを待ち受けていたのは、想像を絶する光景だった。
辺りに漂うは焼け焦げた煤と、人肉が焼けた吐き気を催すような臭い。

つい先ほどまでは何事もなく建っていたはずの住居やビルが崩落し、道路はそれらの瓦礫によって埋め尽くしていた。

「……あいつは、来なかったのか？」

「ウルトラマンは…仮面ライダーは…？
なんで、来てくれないんだ…？」

すると、地下に避難させていた民間人たちが遅れてユウジの近くに現れていた。

「なんであいつらは来ないんだ！？　今までだって私達を助けに来てくれたじゃないか！！
なにが人類の味方だ！！　とんだ詐欺師じゃないかッ！！」

民間人の一人が、憎しみを込めて叫んだ。

無理もない…ウルトラマンも仮面ライダーも、ずっと力無き者の味方として脅威と戦い続けてきた。しかし、今回は来なかった……大量の死者を出していながら、彼らは現れなかったのだ。

それは、彼らが人々の信頼を裏切ったのと同意であった。

「…どうして……どうしてこうなっちまったんだよ…。
畜生…畜生ォォォッ！！！」

何も出来なかった自分への苛立ち、そして信頼していた存在への裏切りにも取れる行為への怒りと憎しみ……様々な負の感情がめまぐ

るしく混ざり合ったまま、ユウジは慟哭を上げた。

そして、ここにも…彼らに対する憎悪が芽生えてしまった者がいた。

「……げほ、げほっ」

リム・ファイアーは、咳き込みながらシェルターに避難していた民間人と共に外から出ていた。

「…なんだよ…これは…」

リム・ファイアーは、自分の目に映る光景がどうにも信じることが出来なかった。

足元には大量の死体、瓦礫…そのなかには、自分の父親であったピン・ファイアーが変わり果てた姿で転がっていた。

「あ、あ、あぁ……うぁあああぁあああぁあああ！！！」

リム・ファイアーは父の亡骸を前に、涙と嗚咽と共に慟哭を上げた。

「…許さない…何が英雄だ……！！！

この落とし前は…いつか必ずつけてやる……！！」

幼い少年は、激しい憎悪の表情を浮かべながら自分たちを裏切った

英雄への復讐を誓った。

それがただの逆恨みでしかないことは彼自身がよくわかっていた…
…わかっていたが、全てを失った彼にはこうすることでしか、己を保てなかった。

…それからと言うもの、怪獣や怪人による事件も散発的に続いたが、やがて怪獣たちもそれを倒すはずのウルトラマンや仮面ライダーも姿を消していった。

人類を見捨てた、私たちに見切りを付けた、新たな脅威が現れたなど、彼らが姿を消した理由について様々な噂が囁かれた。
しかし治安悪化による紛争や暴動、復興作業や質量兵器の復活などによりその噂は次第に下火になっていき、最終的には誰の口からも語られることはなくなっていった。

「…兄ぃ、起きてよ！！」
「ん、あ…？」

ソファに身を横たえていたユウジは、リリアの声で夢から覚めた。

「依頼、来てるよ！　それもはやてさんから！」

と、リリアは普段依頼受託用に使用しているノートブックＰＣに届いたメールを見せた。

Ｓｅｎｄｅｒ：ハヤテ・ヤガミ
Ｔｏ：ユウジ・ナルミ
ｔｉｔｌｅ：お使い頼まれるか？

ごきげんよう。元気にしとるか？　なかなか活躍しとるみたいやな。
そんな君に頼みがある。
ホルデス採掘場を本拠とする武装勢力からうちらに物資提供の申し出があってな、君にはその物資の受け取りを頼みたいんや。
ホンマやったらわざわざ他人に任せるような仕事やないと思うけど、戦線全体が極度の緊張状態にある今は何が起こっても不思議やない。
そこで、念のため君という保険を掛けることにしたというわけや。
もし進行に障害が現れた場合はすべて排除してくれてかまわへん。
君には物足りない仕事かもしれへんけど、よろしく頼むで。

「…すまねえなリリア、わざわざ知らせてくれて。
そだ、フレアライルの補給は終わったのか？」
「大丈夫、自分の腕はパーペキだぞっ！！」
ユウジの問いにリリアは胸を張りながらユウジに返し、ユウジはリリアの頭をわしわしと撫でるとそのままＡＣガレージに向かって走

り出した。

「……またあの夢か」

とある旧管理局の倉庫地帯の一角、ここにはリム・ファイアー一味のアジトがあった。

バレットライフのコクピットの中で、リムはひどく汗をかきながら夢から覚めた。

「……俺はもう、迷わない…。
父さんのためにも、必ず奴らに復讐を…！！」

リムは自分に言い聞かせるように呟くと、バレットライフのコクピットから降りていった。

かつて憧れた、異界の英雄たち。　同じくも違う事象を辿った二人の傭兵。

一人は裏切った英雄に失望を抱き、一人は抑えきれない憎しみを抱いていた。

この世界はもう、俺達のようなろくでなしでも楽しく暮らせるよう

な優しい世界ではなくなった。

生きる為に、戦う為に、己が欲望の為に、自らの信念の為に…俺達は戦っている。

だからこそ、俺達は……

あの優しき世界に、別れを告げる――――。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1170x/

魔法戦記リリカルなのはLastwitch's

2011年11月21日23時48分発行